

西内李佳¹: 報告—第35回日本植生史学会談話会Rika Nishiuchi¹: Report—The 35th forum of Japanese Association of Historical Botany

テーマ: 佐渡の天然スギ

日時: 2012年11月24日(土), 25日(日)

場所: 佐渡島(新潟大学演習林, 佐渡博物館)

第35回日本植生史学会談話会が、日本植生史学会第27回大会に続いて上記の日程で開催された。巡検の目的は、新潟大学演習林の林齢500年を超えるスギの天然林を中心として、未だ謎の多い佐渡島の生物相に対する理解を深めることである。世話人は、本間航介氏(新潟大学)、荒川隆史氏(新潟県教育庁)の二氏で、参加者は30名であった。ツアーコンダクターの役割を務められた荒川氏の案内で、参加者は、24日の大会終了後に集合してバスで新潟港まで移動し、フェリーターミナルでの夕食後にフェリーで佐渡島へ渡った。夕食時に振舞われたビールと日本酒に加えて、全員に配布された500ml缶ビール(船内用)のおかげで、佐渡島に到着した時には参加者はかなり上機嫌であった。

巡検本番は翌25日である。行く先々で地元の方に「奇跡のような」と形容されるほど、この時期としては稀と言われる好天で、巡検日和となった。大まかなコースは、日本三大巨岩のひとつである大野亀を見学し、新潟大学演習林を視察した後、佐渡博物館を見学する、というものである。佐渡島をぐるりと一周する工程だが、その日の午後のフェリーで本土に帰らなくてはならないので、ややタイトなスケジュールである。

移動のバスの中で、本間氏から佐渡島の地形、地史、気候、動植物などについての説明をしていただいた。佐渡島の地

形は、北西に位置する標高約1000mの大佐渡山地と、南東に位置する約600mの小佐渡山地、そして二つの山地に挟まれた国中平野からなる。大佐渡山地には冬期に猛烈な季節風が吹きつける。本間氏は、この強烈な風の風速を計測しようと何度も試みているが、どんな風速計も壊れてしまい未だに計測できていないという。この季節風の影響で、大佐渡山地では標高の割に強い山頂効果が生じて、山頂部では高山植物からなるお花畑が分布する。大佐渡山地の主要な森林タイプは日本海型多雪地に普遍的に見られるブナ帯要素だが、対馬暖流の影響を受ける小佐渡山地では、暖温帯要素を海岸付近に多く含んでいる。寒地植物と暖地植物の分布境界線とされている北緯38度線が島の中央を通過し、寒・暖両系の植物がすみ分けていることが佐渡島の植物相の大きな特徴である。私は学部生の頃、日本列島の植生図を初めてまじまじと見た時から、佐渡島について「ひとつの島の真ん中に植生帯の境界があるとは面白そうだ。どのように分かれているのだろうか?」と気になっていた。今回の巡検に参加したのは、もちろん貴重なスギの天然林を見たいということもあったが、第一は、この目で佐渡島の植生を見て、上記の好奇心を満たしたかったからである。

カンゾウの花で有名な大野亀でトイレ休憩を取った後、1時間ほどで、大佐渡山地北部に位置する新潟大学演習林に到着した。演習林のスタッフの運転する車4台に乗り換え、大佐渡山地を登った。日本海を一望できる地点で一旦車を降り、本間氏の説明を受けた(図1)。大佐渡山地では、日本海型多雪地のブナ帯要素によく見られる植物が分布しているが、ブナが少なく、代わりにスギが多い。佐渡島では霧や雨の日数が多く、スギ天然林は雲霧帯に形成される独特の植生であるという。また、大佐渡山地では、風が吹き溜まる地点では6mもの積雪が見られるが、風が吹きつける尾根では風が強すぎて積雪しない。ブナはふつう吹き溜まりにしか分布しないそう。

車に戻ってさらに少し登り、新潟大学演習林に到着した。車を降り、「大王杉こっち」という看板のある遊歩道から林内に入った。演習林内は、初めて見る天然スギが多く生えていた。スギ林といえば、本州では植林として植えられた太さも樹高も同じくらいの単調な林しか見たことがなく、面白いと思ったことはあまりなかった。しかし、佐渡の天然スギは、太さも樹高も、そして樹形も多種多様であった。太くて樹高が低いスギが多かったが、これは強風に対応したためだそう(図2)。



図1 大佐渡山地中腹にて、奥に日本海、スギ林が広がる。

林内にはヒノキアスナロも多く生えていたが、どれも小さく、大きいものでも樹高は人の背丈ほどしかなかった(図3)。本間氏によると、新潟大学演習林の稜線部は積雪が多すぎてヒノキアスナロが直立できず匍匐してクローン成長するので、花を咲かせたり種実を付けたりすることがほぼないという。つまり、ヒノキアスナロがいくら繁茂していても、堆積物中からは花粉も種実も検出されない状態となる。これは、植物化石を用いて古植生を復元する研究をしており、特に氷期のレフュージアに興味を持っている私には衝撃的な話であった。過去に、厳しい環境下で“クローン”などで細々と生育している植物がいたことを証明するには、葉や材の化石を見つけるよりほかにない。したがって、ある時代のある地域には分布していなかったと花粉分析などの結果から考えられていた植物が、実際には分布していたということも十分にありうると考えられる。つくづく古植生研究の奥深さを実感した。非常に有意義なお話が伺えて、自身の研究意欲も増し、とても楽しい演習林のハイキングとなった。

演習林を出てまた車に乗り込み数分後、2008年に開催された洞爺湖サミットにその写真が飾られたという有名な「金剛杉」の前で昼食と集合写真撮影をおこなった。国を代表するスギとして選ばれただけあって、威風堂々とした佇まいであった。

「金剛杉」を出発して1~2時間、車窓を楽しみながら佐渡島北西の海岸沿いを南下し、国中平野に建つ佐渡博物館に向かった。佐渡博物館の玄関では、博物館のスタッフとトキの剥製が出迎えてくれた。博物館で小一時間、参加者は思い思いに展示を見学した。佐渡博物館は、佐渡の成り立ち、風土、動植物、歴史などをバランスよく展示している博物館であった。地方の小規模な博物館は、とすれば“郷土資料館”になりがちだが、地学分野についてもかなりの展示面積を割いていたのが印象的であった。ジオパークの影響かもしれない。企画展はこの時「佐渡金銀山展」で、金山の全盛期を映した貴重な映像を見ることができた。佐渡博物館を出て、国中平野を横切りフェリーターミナルに向かい、巡検の全行程が終了した。

今回は佐渡島を一周したため移動時間が比較的長い巡検であったが、移動の最中、本間氏の説明がない時にはバスガイドさんが見事なガイドで終始参加者を楽しませてくださり、次の目的地までの移動時間を長く感じたことはなかった。

今回の巡検は、本州ではなかなか見ることのできないスギ天然林を含む佐渡島の植生を見る貴重な機会となった。



図2 新潟大学演習林のスギ。



図3 新潟大学演習林のヒノキアスナロ。この写真のヒノキアスナロの樹高は150cmほど。

今回は幸運なことに天候に恵まれたが、天候が不安定な時期の離島の巡検は、交通手段の問題でスケジュールを組み立てるのが困難であり、企画しにくいものであるかもしれない。しかし、離島に行かなければ見ることができないものは多い。なかなか難しいこととは思いますが、今後もこのような機会を設けていただけることを願っている。末筆ではございますが、世話人の本間氏、荒川氏と、新潟大学演習林の方々、佐渡博物館のスタッフの方々、バスの運転手さんとバスガイドさんに心より感謝申し上げます。

(〒271-8510 千葉県松戸市松戸648 千葉大学大学院園芸学研究科)